

沼津高専 OB 近況報告

【自己紹介】

私は 2006.3 月に沼津高専 機械工学科を卒業した、吉村 大城（よしむら だいき）です。出身地は静岡県浜松市です。（浜松市立南陽中学校卒）
浜松（西部）と沼津（東部）では距離は離れていますが、沼津高専へ入学を希望する静岡県西部の学生も多くいます。

私は沼津高専を卒業後、神奈川県横浜市にある株式会社アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド（IHIMU）に入社しました。会社の詳細説明は、後述させていただきます。

【沼津高専を志願した理由】

中学生の頃からでしょうか、段々と将来について、漠然とですが考える様になりました。その中で自分の心には、『早く自分自身に力（技術）をつけて、将来働いていきたい』との思いが有り、いわゆる普通科が多い、私立・公立の高校進学はあまり考えていませんでした。身近な工業高校から自分なりに調査していく中、工業高等専門学校が存在を知り、同じ県内である沼津高専を志願しました。

補足ですが、一応私立受験も受け、その次に沼津高専を受験し、合格に至った為、公立受験を辞退した経緯があります。私立・国立（←当時は。現在、独立行政法人国立専門学校機構）・公立の3つを受験する事が時期的に可能です。

【高専の良さ・社会で活かせる事】

① 5年間で大学レベルの内容を学べる

一般的には、高校3年、大学4年・・・といった道に歩まれる人が多々いると思いますが、高専では5年間の内に、高校教育内容はもちろんの事、大学工学教育内容も学ぶ為、社会に出ても大学卒と同等の技術力を持っていると、自ら社会に出てもそう感じます。進路の多様性は大学工学部と変わる事は無いはずで、むしろ、大学よりも就職率は大幅に良いのが、高専の一つの特徴かと思えます。

高専から大学へ編入した同級生から、当時話を聞くと、編入して2年間（=大学卒）は、ほぼ高専で受けた授業と同じ内容だよ。という声を耳にしました。更に技術を特化したい人は大学院まで行く友人もいました。

企業から見てみても、大卒よりも2歳若い為、採用する側、される側にとっても大きな利点があります。

沼津高専は5学科ありますが、それぞれの分野で特化した科となっている為、どの科へ進んでも、いずれ就職する企業の中では、各社様々ですが設計・開発・現場責任者等の技術能力を活かせる職に就くことが出来ます。自分で考えたものが、製品になる。繋がっていく。その事に喜びを見いだせるのであれば、高専で学ぶという事は今後の人生で非常に役立つことが多くあります。

また、製図レベルに関しては機械工学科卒の高専生が一番高いのではないかと感じています。大卒以上と比べても、入社するまでの製図経験や、すでに持っている基礎知識としても大幅に高専卒の方が高いと思います。

機械工学科に関しては、様々な企業からの求人も多いです。それは総合的な面で、企業に必要となってくる知識（機械工学）を持った学生がいるとの、企業側の判断があるからです。

② 工場実習・実験

機械工学科は1年生から卒業まで工場実習があり、『自ら経験して学ぶ』ことの出来る場所です。机上の勉強だけでは、やはり身に付き方にも違いが大きく出ます。

実際に自分たちが検討・設計し、その図面を基にモノをつくる事をします。大小は様々ですが、社会に出た時に行う行為を、学生のうちに経験できるのです。社会に出た今、この点が非常に高専卒で良かったと感じる所です。

工学的な理論が分かり、その上で、モノを作る工程やそれに用いる工具・機械が頭の中でイメージ出来るわけです。

もちろん、就職する会社によって携わる製品は異なってきますので、製作工程やノウハウ等は入社してから覚えていきます。しかし、上述したルーチンが出来るわけなので、すぐに頭でイメージが整い、職場に活かせる事ができます。

一般生活においても授業で学んだ事柄が、車やバイク、電化製品からDIYまで、私生活での知識にも幅が広がっていく為、高専生時代の工場実習・実験といった経験は、大きく言えば人生に面白味を足してくれるものでした。

③ 寮生活

非常に糧となったのが、この寮生活です。

現在は1年生が全寮制（必ず寮に入寮）となっていますが、私の入学時は1～2年生が全寮制でした。私は自宅が遠かった為、5年間の寮生活を送りました。

15歳～20歳までが同じ場で生活を共にしています。このように、ある程度幅広い年齢層の中で生活をするという事は、社会に出てからも隣り合わせの事実ですので、この中で体験する「人との付き合い」は、自身の成長には非常に良い環境でした。

学生主体で運営していますので、上級生が手本となって、下級生に接します。それに憧れ、下級生の中には、あんな先輩のようになりたい。と思い、成長をしていく人が多くいます。人間性に憧れを持ち、それに近づきたいと苦闘しながら努力する事は、その人の人間形成に一番の効力を発揮すると思います。それが出来る場所が寮生活です。私も様々な寮の役職を務めさせてもらいましたが、十人十色の様々な人に対して、どういった接し方が良いのか等、様々勉強になりました。

「人の為を思い、仲間と共に考え、行動する」それは社会から見たら、これからの学生達には、非常に持って欲しいスキルなのかもしれません。

かわいい子には旅をさせろ。との言葉がありますが、まさにその通りで、15歳から親元を離れ、甘えのきかない中に身を置き、時間制限もある中、友人と同じ時間を過ごす事は、高専でしか体験できない事です。

ぜひ、在学中の学生にも、これから高専入学を考えている中学生にも、寮生活や学校イベント等、何事にも積極的に身を投じて、人との関わりを多く持って欲しいと思います。必ずそれが、これからの繋がっていきます。



(写真は、毎年11月に開催される高専祭にて。

5年生時、機械工学科全体責任者として、取り纏めを行った)



【就職先に関して】

① 入社のかきかけ

高専在学中の4年生時に、インターンシップで現在の会社（横浜工場）へお世話になる機会がありました。人とは違う事をしていきたい。という思いもあり、色々と探す中で、『造船』という世界を見つけました。

造船会社なので、実際に現場で見た船の大きさに圧倒され、また、そこで働く人たちの職人魂に魅かれました。運良く、護衛艦 13DD「すずなみ」の進水式を見学する事ができ、その感動が強く残っており、ここで働きたい。と入社を希望しました。

インターンシップの機会があれば、皆さんもぜひ活用してみてください。



（写真は、弊社 横浜工場全景）

② 会社紹介

株式会社アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド（IHIMU）は、東京都港区に本社を持ち、生産現場として横浜工場、呉工場を有する造船会社です。嘉永6年、石川島造船所が創設されてから150年以上の歴史が有ります。

製品は豊富で、艦艇、巡視船、コンテナ船、タンカー、ばら積船、電気推進船、客船、フェリー、各種浚渫船・作業船など、様々です。ここには規約上、艦艇等の写真等を掲載する事が出来ませんので、詳細に関しては、ぜひホームページをご覧ください。

⇒ <http://www.ihim.co.jp/ihimu/>

補足ですが、本年10月1日（H24/10/1）にはユニバーサル造船株式会社との合併が決まっており、新会社名はジャパン マリンユナイテッド株式会社（JMU）となります。建造量は国内でトップ級、世界でも5位の集団に浮上する事となり、今後、世界一を目指して行きます。

③ 仕事に関して

弊社では高専卒の場合、技術部（設計）、現場担当（現場スタッフ）、品質管理、生産技術、設備管理の順にいずれかへ配属される事が多いです。配属に関しては、大卒・院卒での区分は特にありません。同等の仕事をこなします。

その中で私は、電装設計に配属となりました。電装とは、電気機装の事です。現在、入社7年目となります。

陸上とは異なり、洋上ですので船として一貫して1つの街が形成されるイメージです。電気においては、変電所から電気を供給してもらうわけにはいきません。自ら発電しそれを変電・配電し、船の運転に関わる各機器や生活面に関わる機器へ電気を流します。

私はその中で、電気機器の配置計画や電線ルートの計画、電路や機器を取り付ける為の架台製作図、現場が実際に取付けを行う取付図や、配線する為の配線図等の調製・検討・作成業務を行ってきました。

入社当初は、海上自衛隊が過去に保有した護衛艦の中で、全長及び排水量共に最大規模の艦艇を設計している真っ只中でした。（=16DDH、ひゅうが）

ですので、過去の建造実績も無く、他社の実績もない、新設計の仕事でした。先輩方も非常に困難極まる中で、技術者として育つ事が出来ました。初めて設計に携わる船が、日本で一番の艦艇であったので、お客様である防衛省殿への引渡し式の際には、感動の涙を流した事が忘れられません。

その後、入社4年目～5年目の約2年間は、グループ会社であるIHI AMTEC（兵庫県相生市）への出向も経験させて頂きました。そこでは、電装の現場担当者として、商船（タンカー、コンテナ、ばら積船）の上部構造（居住区）建造を務めました。

設計を離れ、現場管理の業務です。いかに設計から出図される図面が重要である事かは、身を持って経験する事ができ、現在の設計業務へ活かされています。

そして現在は、元の電装設計へ復帰し、様々な船種に対応しています。また、22DDHという前艦を超える大きさの護衛艦建造にも努めています。



(写真は、グラブ式浚渫船)

私が設計として携わるのは、大きな船のほんの一部に過ぎず、やはり一人だけでは船造りは出来ません。様々な担当の人達との繋がり合いの中で、一人一人が最大限の力を発揮し、船が出来ていきます。

スケールの非常に大きな『造船』という舞台で、これを読んでいる皆さんと共に今後、働けたらと感じます。

高専卒業後は、ぜひとも 我が社への検討も宜しく申し上げます。

